寺田寅彦と野村伝四の友情（後篇）

四宮義正

（承前）

２．野村の奈良時代前半（寅彦逝去の頃まで）

当時は大学を出ても就職口は少なかったようで、野村も東京を振り出しに地方の中学校の教師となり、転勤を重ねるがやがて奈良に落ち着く。（前篇略歴参照）

書簡中心であるが交友が復活している。引き続き時系列に並べてみる。

○寅彦日記　大正 11 年 5 月 3 日

帰つたら野村伝四君が来て居た。

(19)寅彦⇒伝四〔書簡〕大正 14 年 8 月 2 日

御手紙難有う御坐いました、「俳句研究」御覧下さったそうで大幸で御坐います。名句ばかりを集めなかった事は全く御説の通りで御坐いますが、小宮君の書いた凡例にもある通り研究の目的や動機がそうでなかったのでどうも致し方がありません。純粋な俳句としての研究は又別にあって然るべきかと存じます。あれを読む人が先生の生活の片鱗を認めて、そして先生の作品などを味わう上で何等かのたしになる事が出来れば仕合せだと思って居ります、大兄の歌拝見しました、如何にも大兄らしい味が出て居て、そう云つては失礼かも知れんが、面白いと思います。

一体俳句には作者の個性が出にくいが三十一文字となるとそれがよく出るように思います。此れはいわれのある事だろうと思います。それで小生などは恐ろしくて歌は作りにくいような気もします。御一笑。

旋風の報告は震災予防調査会報告第百号の（戊）号中に出て居ますが、別刷がありますからそれを御送り致しましょう。単なる調査報告で乾燥なものであります。併し科学上の事実はなんでも「世界的」ですから、その意味では矢張世界的かもしれません。震災予防調査会報告百号の内(甲)（地震）(乙)（地変津波等）(戊)（火災旋風）が出て(丙)（建築被害）(丁)（工作物被害）は未刊です。もし学校図書室にでも御備えになるのなら岩波書店で発売致して居ります。

小宮松根両君へは大兄の御不満を伝えて置きましょう。

右御返事迄、御自愛専一に存じます。草々

小宮豊隆、松根豊次郎と共著の『漱石俳句研究』は大正 14 年 7 月 5 日発行である。伝四が旋風の報告にまで目配りしていたとは驚くばかりである。

(20)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 2 年 1 月 16 日

御手紙難有拝見致しました。平素御無沙汰、昨年の夏だったか御親戚の有馬工学士と赤羽の橋工事見学で落合い御噂をしました。その節端書でも出そうかと思ってついそれ切りになって居ました、展覧会出品の儀、先生の水彩絵葉書でも二三枚出しましょうか。此れは蓋し天下の珍品で門外不出の筈ですが外ならぬ大兄の御すすめ故出陳致そうかと存じます、如何哉。

女学校生徒に科学奨励の宣言は此れはどうも柄になく途方にくれますので御宥しを願度と存じます。それは別として日本の科学奨励策として美人の科学者若干名御養成如何哉、そういうのが或は学会に臨んで講演したり気焔を吐いたり、通俗講演でもやれば、天下の野郎共風を望んで科学研究に志すかも知れません。御一笑御一笑。

大兄は半白でも元気旺盛、小弟頭だけは黒いが段々老衰を感じますので、そろそろ隠退、何処かの研究所にでも隠れて余生を細長く引延しながらすきな仕事でもしたいと考えて居ります。そうなったら芭蕉の行脚の真似でもして奈良へも一度は行って見ようかなど空想を走らせて居ます。

小宮君仙台から時々出京会合致します。松根東洋城とも時々連句の会をやります。九日会には御無沙汰故他の諸君とはめったに会はず、寧ろ今の九日会に出るよりも、昔の千駄木の木曜日を頭の中で繰返して居る方がいいようであります。

右御返事迄　草々

桜井高等女学校長の時に開催した「漱石記念展」に書簡などの出品を依頼した返事であろう。九日会は漱石の弟子たちが師を偲ぶ会。漱石の居ない会合には興味がないということのようだ。

(21)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 3 年 3 月 20 日

謹啓　其後は御無沙汰致居候、扨て御手紙漸く昨日落手致候、少生近来理学部へは出勤不致、地震研究所と理化学研究所等に参り居り、従って理学部より廻送入手迄意外の日数を要し候次第に御坐候、爾後は自宅の方へ願上候。

北条氏の事聞合候処同氏は既に他へ就職決定との事に有之候、数学科卒業生には一人だけ未定の人あれど兵役に出ねばならぬ故困るかと存候。物理科卒業生も大概は片付居候へ共、もし御入用ならば、何とか研究可致と存居候。重ねて御下命願上候。

右要事のみ　草々

伝四はこの年の 1 月に五條中学校長に異動している。新しく帝大理学部卒業生を採用したかったので寅彦に相談を持ちかけたのだろう。

(22)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 4 年 1 月 13 日

拝復　とんだいたづらの Journalism が御目に止まり汗顔の至に存候。御明察の通り随筆大成、随筆全集、随筆選集等が手品の種に有之候。しかるにその蜀山人の一話一言といふのは宅にはないらしく、「奇病」の如何なるものかを知るよしなく今日にも神田辺を物色して手に入れ度と存居候。其上にて大に研究御報告申上度と存居候。

夏目奥さんの「思い出」御覧の事と存候。「写真帖」で久々にて熊本内坪井の家を見て住時を追懐甚だなつかしく覚え候、十三回忌には久しぶりで御墓に謁でましたがケーベルさんの淋しい墓標もつい近くにありました。

「いたづらの Journalism」とは何だろう。『改造』1 月号に出た「化物の進化」だろうか。伝四は方言や民俗学的なことに興味をもっていて著書を出しているから、随筆大成、随筆全集、随筆選集のような本を読んでいたのだろう。

寅彦日記の昭和 2 年 8 月 14 日に「随筆全集」、同 8 月 21 日に、「随筆選集」が見える。漱石の墓は雑司ヶ谷墓地にある。

(23)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 8 年 7 月 4 日

御手紙難有拝見致しました。

続冬彦集は書店の方から御届けするように致しますからどうか御笑覧を願います。いつの間にやら所謂ジヤーナリストになってしまいました。

梨子の誘惑は断念の外ありません。というのは胃と歯の為に堅い菓物をカリカリと喰う事の享楽は久しく遠ざかってしまったからであります。従って短冊の方も自然解消となるかと存じます。

奈良県では半鐘を鋳る産地があるそうですが何か「半鐘」に関する書物でも見付かりましたら御示教を願度と存じます。鐘を鋳る時の「人柱」の科学的の意味を研究したいと思って居ります。

随分久しく御目にかかりませんが次に御上京の時は一度御尋ね下さいませんか。

右貴酬のみ　草々

(24)寅彦⇒伝四〔腊葉絵はがき〕昭和 8 年 8 月 10 日

御手紙難有う御坐いました。人柱の件では大変に御手数をかけまして恐縮であります。鋳鐘の際の犠牲(いけにえ)の話は何処か別の出所から来ているのかも知れません。どうも色々難有う御坐いました。

先日浅間山麓へ参り一週間遊んで来ました、此の端書は其時の御土産であります。なお御自愛を祈ります。

八年八月十日防空大演習の日

空に飛行機のうなりを聞きつつ

寅彦の前便に返事がきたのだろう。「鐘に釁(ちぬ)る」（昭和８年１月、『応用物理』）の関係かもしれない。

(25)寅彦⇒伝四〔はがき〕昭和８年 12 月 29 日

御手紙難有拝誦、蒸発皿御受納被下大幸と存じます。遊楽軒（？）の問題をすっかり忘れていたのを御手紙で思出して大に嬉しくなりました、今度の機会に先生追憶記の補遺として一席伺わして貰う事に致しましょう。

「春琴抄」は一部分読みました。うまいと思いました。明けると五十七才の数え年になります。寒中は萎縮夏になると膨脹します。併し萎縮した切りの冬が何時かめぐり来る事と思います。恥と義理をかくのを第一の養生法と致して居ります。九十五才まで生きることにきめています。

寅彦が明治 38 年８月 27 日の日記に書き、伝四が「散歩した事」に書いているエピソードを「夏目漱石先生の追憶」に書き忘れているとの注意に対する返事である。お互いに漱石との思い出をとても大切にしていることがよく分かる。

(26)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 10 年６月１日

御手紙難有う御坐いました、鹿児嶋の旧火山火口壁分布につき詳細の御示教難有う御坐いました。来週地震研究所で昼飯の時に一同に御手紙を見せて地質の方の人ともヂスカッシヨンの話題に致し度と存じて居ります。

藤の実のはねる件、随筆をかいた後に少し計り研究した結果を理研の報告に発表したものがありますから御笑草に御目にかけましょう。その研究の結果からヒントを得て平田君に山火事警戒用湿度計を考案する事を提案したのでした。もう少し実用的な設計をして一般の使用に適するようにし度いと思って居ります。

奈良行もどうもおっくうで中々みこしが上がらず、旅行ぎらいの直る妙薬はないものかと存じます。

方言の御研究は御つづけの事と存じます。少生も土佐方言を研究したい希望だけもっていましたが近頃土井晩翠氏夫人が春陽堂から「土佐の方言」という小冊子を出し中々よく集めてあるようであります。

小宮君は時々上京します。今度小山書店から「漱石雑記」というのを出しましたがもう御覧になった事と思はれます。

火山分布、藤の実、山火事などは寅彦の研究テーマであり、随筆にも書かれている。広く情報を集めていたことが分かる。また、高知県佐川出身の土井八枝の『土佐の方言』に序文を書いている。

(27)寅彦⇒伝四〔書簡〕昭和 10 年 6 月 26 日

御手紙難有う御坐いました。藤のレインコートは初耳で特にその伸縮の話は愉快であります。それで想出しましたが一体あの簑なんかも実にインヂェニアスな発明だと思はれるが古いものだから誰も一向ほめない。一つ「蓑の物理」でも論じて見ようかと思います。

方言や古俗の蒐集は是非やって頂き度と思います。そして秘蔵しないでどしどし発表する事を御願い致します。

学者が「自重」して発表しないのは学界を益する所以ではないように思われます。仮令笑われてもけなされても結果はなにがしかの貢献になると思うが如何哉。

土井晩翠夫人の「土佐方言集」が出ました。君の方の郷里方言との比較でもして下さらば愉快と思います。君の御手紙と同時に台湾台北の測候所長西村伝三君の手紙が来た。朝食の席だったので子供等が二つの手紙の名前を比較して偶然の類似を不思儀がりました。西村君は東大の物理出身であります、颱風の本元の研究をやって居ります、日本を襲う颱風に対する Sentinel の重任を引受けています。

右御返事旁冗談のみ　草々

Ingenious：巧妙な。　Sentinel：見張り。

『寺田寅彦全集』には伝四宛て書簡が 27 通収載されている。決して少なくない。漱石の書簡と一緒にとても大切に保存していたことが窺える。

伝四が漱石について書いた文章をあげておく。

①「「琴の空音」に就て」昭和 3 年版漱石全集月報第 6 号（昭和 3 年 8 月、岩波書店）
②「「門」の中の呉服屋」同第 17 号（昭和 4 年 7 月）
③「「二百十日」前後」同第 17 号（昭和 4 年 7 月）
④「散歩した事」昭和 10 年版漱石全集月報第 16 号（昭和 12 年 2 月）
⑤「神泉」同第 18 号（昭和 12 年 4 月）
☆「漱石物の装幀者橋口五葉」『近世印刷文化史考』（昭和 13 年 11 月 10 日、大阪出版社）

３．野村の奈良時代後半（寺田寅彦歿後）

野村は五條中学校退職後、奈良県立図書館長となり、方言や民俗に興味を持ち、著書を出している。代表的なものを紹介する。

☆『大隅肝属郡方言集』〈全国方言集二〉（昭和 17 年 4 月 20 日、中央公論社）

昭和 52 年 11 月 30 日、国書刊行会から漢字かな遣いを変更して、新しく版を組み直して復刊されている。

巻頭に柳田国男の「肝属郡方言集に題す」が置かれている。

最後になお少し付け加えて置きたいことは、肝属郡方言集の著者は、同時に又南大和の方言の大量の蒐集者でもあったという一事である。野村さんは大学を出てから久しい間奈良県の教育界に働き、今も引続いて同じ県の公職に就いて居る関係から、大和の言葉に対しては故郷以上の親しみをもって居られる。それが一方の若い日の追憶を刺戟して居ると共に、之によって研磨せられた言語感覚が、更に又第二の故郷の方言の特徴を、比較的容易に会得するに役立って居るようである。（略）

一人で二箇処以上の方言を集めた者も、今までまるまる無かったわけではないが、旅とか伝聞とかの時間を掛けぬもので、大抵は双方とも粗末であった。二十何年も他郷に止住して、しみじみと土地の言葉の差異を体験し、それに促されて翻って少年の日の、無心真率の表現を味わいなおすというような境遇に置かれて居る人は多かろう筈がない。（略）

野村伝四の「序」を紹介する。

その後私は学校の英語教師となった。而して専ら英書に親しんだ。同時に日本の書籍をも気の向く儘に硬軟各方面に亘って漁り読んだが、併し郷土関係のものは只一冊以外に出でなかった。それは柳田先生の「山島民譯集」上巻である。大正の初め頃、日本橋の丸善から「甲寅叢書」と云って、五百部限定版、定価一冊五十銭で各方面の珍書を逐次出版した事が有った。「山島民譯集」はその叢書中の一で有ったが、この本を読んだ時、私は何とえらいもんだと感じた。資料が次から次からと限りなく提出されて応接に遑なしと云う様で有った。で其時は只読んだと云うだけに止った。（略）

私も時々倭漢三歳図会など座右にして、昔なじみの物名と図会などに逢着すると、云い難き歓喜を覚ゆるので有った。この時しも現われたのが、先生の「蝸牛考」で有った。今迄懐古的に愛玩して居た郷土の方言が何ぞ料らん学問的に重要な資料となり得ると云う事を教えていただき、そんなものなら身分に相応した御奉公を方言界に致したいと決心し、この時初めて方言帳を座右に備えつけて本格的になった。

薩摩は方言が強くて、他国者には全く理解できないが、薩摩の中でも小さい地域内しか通じない方言も多かったようである。

「序」で遠く離れた郷里の方言を採取する方法として、三人の姪に手紙で訊ねたとしている。また、たまに帰郷した時も有効に利用して、面談で訊ねている。

この書の構成は形容詞、副詞、動詞、名詞（植物、動物、農業、人体など詳細に区分）などに六分類し、約 2,700 語を集めて解説してある。まことに労作である。有名な例としては、「妖怪、神祇」の項目に「いったんもめん」があって、次のように記載されている。

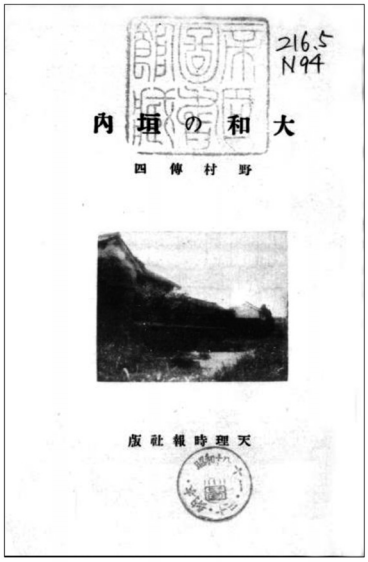
　　イッタンモンメン　お化けの一種。長さ一反もある木綿の様な物がヒラヒラとして夜間人を襲うと言う。

ゲゲゲの鬼太郎の妖怪の出所がこんなところにあったのである。

☆『大和の垣内（かいと）』（昭和 18 年 11 月 20 日、天理時報社）

（奈良県特有かもしれないが）垣内（かいと）とは、大字とか小字くらいの小集落のことで、団体生活の単位になっている。市町村制になっても住民の間では、このカイト名でないと話しが通じないそうである。第一章は、垣内の語源、垣内名、集団移民と村落形式、垣内の習俗の項目で説明している。第二章では、大和の平坦部の奈良盆地を国中（クンナカ）と云っているが、その国中にある、周囲を濠に囲まれた環濠垣内について解説し、外部・内部を見学して状態を説明している。第三章では、垣内の発生として、上代の渡来人、帰化人の動向を解説、大和に多い溜池、古墳、寺院について説明し、安全を守るためにやむを得ず濠をめぐらして集落としたとしている。

これも労作である。学問区分としては、民俗学になるのだろう。ウイキペディアで検索すると野村は、日本の英文学者、方言学研究者、民俗学者、教育者。となっている。



左：野村伝四『大隅肝属郡方言集』扉（昭和 52 年 11 月 30 日、国書刊行会、徳島県立図書館蔵）

右：野村伝四『大和の垣内』扉（昭和 18 年 11 月 20 日、天理時報社、国立国会図書館蔵）

☆野村伝四遺稿『薩摩義士』（昭和 40 年 10 月 9 日、野村不二発行）

ネット「編集工房　スワロウデイル」から引用する。

伝四の甥にあたる、野村不二が、自分の息子の結婚式を記念して刊行した小冊子。大正 6 年（1917）8 月、西濃地方を徒歩で旅行したときの体験をもとに、木曽三川の改修工事（宝暦治水）のことをまとめた「薩摩義士」を収録。

中谷宇吉郎の「線香の火」によると、寅彦は地方の教師になる人に、金や設備が無くてもできる研究があると話した。伝四は自然科学者ではないが、この寺田の言葉を実践したといえる。

伝四は奈良で亡くなった。中川十郎によると出身地の肝付町前田長能寺に墓があり、裏面に伝四が結婚した際に漱石が贈った句「日毎ふむ草芳しや二人連」が刻まれているとのことである。

夏目鏡子『漱石の思い出』によると、「二人して雛にかしづく楽しさよ」との二句が袱紗に染められて贈られたそうだ。

（注）日記、書簡は漢字やかな遣いの変更、句読点の追加などがある。

本文中に挙げた書籍もあるが主な参考文献をまとめておく。

・藤井淑禎『不如歸の時代　水底の漱石と青年たち』（1990 年 3 月 31 日、名古屋大学出版会）特に「野村伝四」の節。

・原武哲編『夏目漱石周辺人物事典』（2014 年 7 月 25 日、笠間書院）特に「野村伝四」の項。

・佐藤春夫編著『漱石の読書と鑑賞』（昭和 11 年 5 月 20 日、小山書店）

「寒水村」が再録されている。また漱石が弟子たちの作品について指導した手紙が収載されている。

・佐藤健『漱石と野村伝四と我が母と』（2009 年 7 月 1 日、文芸社）

著者は野村が下宿していた薮中家（鶴吉）の孫。

・『館報駒場野』第 45 号（平成 8 年 3 月 29 日、東京都近代文学博物館）

小山内薫、川田順、小宮豊隆、津田青楓、寺田寅彦から野村宛て書簡が掲載されている。寺田の手紙は 17 通。絵はがき（2 枚）の絵面（全集にはない）が出ている。

・ネット記事「編集工房　スワロウデイル」

・ネット記事　中川十郎「漱石と伝四、そしてわが学生時代」2013 年 3 月 12 日

（終）